

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	東京都荒川区南千住 8 - 2 - 1
園名	荒川区立南千住第二幼稚園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

自然

<テーマの設定理由>

本園の地域及び園庭は自然が充実し、植栽も豊かである。一方で園児の立ち入らない場所や使用していない箇所がある。教師の援助と環境の工夫を図り、幼児の自然に対する興味関心をより一層高めたい。

2. 活動スケジュール

1. 11月26日

○園周辺にある落ち葉や街路樹、木の実などに触れながら散歩をする。

・木々の様子や葉の形、実や草花の様子などに気付いたり、発見したりする。

2. 11月28日

○採集したものをじっくり見たり、感じたこと分かったことを共有したりする。

・じっくり見ることで新しい発見を楽しみ、さらに自然へ関わろうとする。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

【素材・道具】（・は1回目の準備物、*は2回目の準備物）

・探検バック ・枝など長いものや大きいものを入れる紙袋 ・カップ

・採集したものを集めるための大判のトレイ *紺色の画用紙を底に貼ったトレイ

・タブレットパソコン *スクリーン *プロジェクター *デジタル顕微鏡

*虫眼鏡

【環境の設定】

- ・見付けたものを振り返るために、大判のトレイや大小様々な白画用紙、カップ、豆腐の容器などを用意し、拾ってきたものを広げたり、まとめたりするなどして思い思いに関われるようにする。
- ・タブレットパソコンやデジタル顕微鏡を使い、話題に出ている場や対象物が共有しやすいようにしたり、細かいところまで見たいと思う気持ちを支えたりする。

4．探究活動の実践

< 活動の内容 >

- 「幼稚園の周りで色々な発見を楽しもう」
 - ・木や葉の様子を発見したり、落ち葉や木の実などを見付けたりする。
- 「発見したものをじっくり見たり感じたりしてみよう」
 - ・じっくり見たり、感じたことを伝えたり、友達と気づきを共有したりする。

< 活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり >

11月26日（水） 散歩の場面

○藤の葉 特徴を捉える

- ・黄色く色付いたもの→「細長い葉っぱ」「これは太っちょ」「ギザギザの葉っぱ」
「ホットドックの葉っぱ」
- ・灰色になったもの→「死んでいる葉っぱ」

○カキの葉 色を捉える 感触の違い

- ・「赤、見付けた」「黄色」「大きい」
- ・表と裏との感触の違いを発見
→「こっち（表）はつるつる。こっち（裏）はふわふわ」色や感触の違いを発見。
- ・乾燥しているもの→「これはカサカサ」「硬い」

教師が「同じカキの葉っぱなのに違うんだね」と伝え、友達の見付けた葉に興味をもち、触って確かめようとする姿や「本当だ」と納得する姿が見られた。

○桜の葉 見立てる 大きさ・色を捉える

- 「見て、これ傘」「黄色い小さい葉っぱ」「赤ばかり見付けた、また赤」
- ・穴が空いている→目を当てて覗く。自分で加工してお面のようにする。
- ・友達に見付けたものを「見て」と知らせて共有しようとする。

見付けたものをただ集めるだけでなく、他児の見付けたものにも気付いたり、友達と違うものを見付けたり、新しい発見を使用という意欲が引き出されるよう、それぞれの見付けたものに注目できるように言葉掛けをする。

○ツバキの実、サルスベリの実、石 予想する 関連した知識を話す

- ・「これは花が咲いて枯れたやつじゃない?」「これはチューリップだと思う。小さいチューリップ」「これ種だ。埋めたら花が咲いてきて、ピンクの（花）ね」
- ・石を見付けて隕石だと話す友達に対して「石ってレンガやガラスで作れるんだって」

これまでの経験や経験で得た知識に基づいて目の前の物の正体を予想したり、それに関する話を友達に伝えようとしたりする姿が見られ、教師も一緒になってその予想を聞き、「なるほど」と受け止めた。

○ローズマリー、スギの葉 匂いを感じる

・「いい匂い」「臭い」「これは匂いしない」「枯れているもの（匂いが）する」

友達と匂いを共有しようとする。自分にとってのいい匂いと友達にとっての臭い匂いがあることを体験する。一緒になって匂いを嗅ぎ、「Aちゃんは臭いんだって。Bくんはいい匂いだなって思ったんだよね。面白いね」とそれぞれの感覚の違いを受け止める。



○木の幹の模様 見立てる 物語が生まれる

・「目がある」「こっちはつぶっている目」「さっき見た英語を全部合わせるとここが開くんじゃない？」

「よく見付けたね」と見付けたことやその物語を受け止める。

○落ち葉が飛ぶ様子 体を使って表現 なりきる

・落ち葉が強風で吹き飛ばす様を見て、「すごいスピード」「葉っぱが走っている」「くるくる」と言い、その場でくるくると回る。

「本当にくるくるしている」「すごい」「早い」と感動を共感し、葉の様子に視線が集まり、注目できるようにする。

○カエデの葉 大きさを活かす 見立てる 音を楽しむ

・「大きい」「でっかい」「顔よりも大きい」「お面みたい」「○○ちゃん（自分）はどこにいますしょうか」「カサカサ」「シャカシャカする」「シャリシャリする」「いい音」「パリパリ」

それぞれの幼児の気付き、驚きを受け止め、共感する。一緒に落ち葉を踏み鳴らし、音を大きくたてる。

○枝 長さを感じる 見立てる

・「長い」「おっきい」「お掃除している」

立ててみたり、端をもって長さを感じたりする。また、教師が「重いの？」と尋ねると「ううん、軽いよ」と持ち上げて見せる。枝先の複数に分かれている部分を地面に付け、熊手のようにして落ち葉を集めようとする動きをする幼児もいた。

○クヌギ **ゲームを考える**

・「ここいっぱいあるよ」「でぶっちょ」「これは当たり」「見て！ぴったり」

クヌギを発見したことを喜ぶ思いに共感する。帽子付きのクヌギを見付け、当たりと話す幼児や、帽子が付いていないクヌギに帽子を見付けて被せて遊ぶ幼児もいた。

- 振り返りの場面では、それぞれが見付けたものを大判のトレイに空けて共有する姿が見られた。カキの葉の表裏の感触の違いを再共有したり、赤い実を見付けた幼児が、臭い匂いがすること発見し実をつぶして紹介したりするなどし、それぞれが見付けたものを改めてみんなに発信する場となった。また、友達が紹介したカエデの葉を見て、「キツネに似ているね」と新しい気づきを話す様子も見られた。



11月28日（金） 虫眼鏡やデジタル顕微鏡を用いて自然物を拡大して見る場面グループ1.

虫眼鏡で見る

教師：「昨日みんなが発見したつるつる（のもの）をタブレットパソコンで大きくして見たらぼやーってしてあまりよく見えなかったね。今日はみんなが欲しいって言っていた虫眼鏡を使ってよく見てみよう。」

幼児：自分たちでつるつるしていると感じたものを手に取り、虫眼鏡で観察する。

「これ、つるつるじゃない？触ったらごつごつしている。」

教師：「ごつごつって何？」

幼児：「ごつごつって、凸凹ってこと」

（クヌギを見て）「ちょっとごつごつ。周りが。」

（ヒビの入ったドングリを見て）「口がある。つるつるじゃない」

教師：「何があるとつるつるじゃないのだったけ？（昨日話していたよね）」

幼児：「ヒビ！」

教師：「じゃあヒビがないか、もっとよく見てみよう」

デジタル顕微鏡で見る

）ツバキの実を見て

幼児：「え！とげとげ！面白い～」「なんか怖い…」

(イチョウの葉脈を見て)「ぼこぼこ」

(クヌギの筋見て)「ヒビ入っている」

教師：「さっきのイチョウはヒビがあった？」

幼児：「ない！模様の線があった」

教師：「そっか、あれは模様ね。模様って線のことなのか。」

)サクラの葉を見て

幼児：「おお～。いい色！さっきのAちゃんのと世界が違う」

教師：「どこが違う？」

幼児：「色。海がある」

幼児：「ツバキの世界はどんな感じなのかな」

教師：「ツバキの世界か。どんな感じだと思う？」

幼児：「うーん。ちょっとぼつぼつ？」

(見てみる)「シュワシュワになっている」

「しわしわだ…」

グループ2 .

虫眼鏡で見る

幼児：(クヌギを見て)「後ろのところだけつるつるじゃない。なんかちょっとざらざら。ここ(てっぺん)がチクチク」

(実を見て)「ここが黒くてボコボコ」

教師：「本当だ。なんで黒いんだろうね」

幼児：「ここがさ、ぶつかって黒くなったのかも」

教師：「なるほど。ぶつかると黒くなるのね」

デジタル顕微鏡で見る

)ドングリを見て

幼児：「いっぱい点々みたい。点々している」

教師：「本当だ。点々は何だろう」

幼児：「ここだけさ、ぼこっとしている」

「(さっき見えた)黒い所だけじゃない。黄色いところもある」

教師：「本当だ。大きくすると色々見えてくるのだね。他のも見えてみたら何かわかるかな？」

)クヌギを見て

幼児：「目みたい」

「とんとんとんっていうのがある」

教師：「とんとんって何？」

幼児：「うーん。」「とんとんっていうのは、点々ってこと？」

「点々あった！」

「ううん。点々ない。縦になっている」

教師：「縦になっている？」

幼児：「線が入っている」

グループ3 .

虫眼鏡で見る

幼児：「なんか黒いのがある」

「ヒビ。ここ、白く見える」

「黒いところがある」「ここ、ざらざら」

教師：「本当だ。黒いね。ざらざらかぁ。でも小さくてあんまり見えないね」

幼児：「もっと大きくして見てみたらいいよ」

デジタル顕微鏡で見る

）ドングリを見て

幼児：「ちょっとここ傷がある。ここに線が引いてあるのだけど」

教師：「どんな線？色は？」

幼児：「白い線」

「ちょっとしましまがあった。ここにも線がある。茶色い線」

「ここは黒茶色」

「ここに線が引いてある。黒茶色の線」

「あー。また線がある！黒い線が引いてある」

教師：「本当だ。茶色とか黒茶色とかの線があるね。他にはある？他のところも見てみる？」

幼児：「見たい！」

「ポップコーン！ポップコーンみたい」

「しましまがいっぱいある」

「白いぼつぼつがある」

- それぞれがデジタル顕微鏡で様々なものを拡大して見ることに興味をもっていた。積極的に活動に参加する中で、教師に自分の感じたことや発見を知らせようとし、それらが受け止められることでさらに自然物をよく見ようとする姿につながった。また、友達の感じたこと、発見したことにも気付き、受け止めたり、比較したりする姿もあった。さらに、形状を擬音語で表現したり、自分の知っているものに例えたりしながら、教師の問いかけに応じる様子が見られた。

4．振り返り < 振り返りによって得た先生の気づき >

- ・ 幼児は様々なことに関心をもち、感じたり気付いたりする力がある。一見、大人にとっては日常の風景と思う環境であっても、教師がどのようにその場を捉え、問いを立て、幼児と環境との出会いの場を設定するかによって、幼児が積極的に環境に関わりながら探究する姿を引き出すことができることが分かった。
- ・ 教師が幼児の一人ひとりの気付きを認め、活動の中のねらいや経験させたいことに基づいて問いを立てることは、友達との関わりを生むことにつながる。また、友達との関わりの中で、探究を深めていく姿が引き出されることが分かった。
- ・ 幼児の姿として、自分の感じたことや発見したことを教師や友達に受け止められることにより、自分の感覚や気付き、考えをよりよいものにしようとさらに思考する姿が見られた。さらに思考しようとする姿は、探究する姿そのものであるため、教師は、それぞれの感じたことや発見したことに対し、言葉を繰り返したり、すぐに認めたりすることで価値付けていくとともに、探究に向かうために必要な道具や場・時間の保障といった環境の工夫や状況に応じた環境の再構成を行うことが必要不可欠である。
- ・ 探究する姿を引き出すための環境の工夫として、それぞれの道具が何に使われるかを多様に予想した上で、活動のねらいや教師の願いに即して物を厳選したり、出すタイミングを調整したりすることが大切である。また、対象物であるものの特徴や仕組みなどを幼児が捉えやすいよう、ものの色や素材にも配慮することが効果的であることが分かった。
- ・ 今回の活動は、幼児が電子顕微鏡を使った初めての活動であった。そのため、電子顕微鏡を使うことへの魅力が先立ち、次々に見てみたいという思いが強くなった結果、様々な物を比較し、共通点に気付いたり、肉眼では見付けられなかった模様、色、形状の違いに驚いたりする姿が見られた一方、じっくりと時間をかけて一つひとつの物を見るという姿が少なかった。そのため、今度も電子顕微鏡を使い、それぞれがじっくりと自然物を見る機会を保障することにより、さらに活動を深め、探究する姿を引き出していくことが大切である。
- ・ 活動の前段階として、その活動を通して幼児にどのような探究活動をさせたいのか、何について探究することができそうかについて教師が十分に検討することや、活動中に幼児がどのようなことを感じたり気付いたりするのかについて教師が様々な姿を予想し、活動における問いを予め考えておくことが重要であると気付いた。